『黄石斎手書逸詩』考

河内利治（君平）

On the Manuscripts of "Yi Shi (逸詩)" by Huang Shizhai (黄石斎)

KAWACHI Toshiharu

一、はじめに

上海有正書局精印発行『黄石斎手書逸詩』（刊行年不明）の綫装本が伝来する。[注1] その体裁を記すと次の通りである。

外題「（楷書）黄石斎先生逸詩」

題箋「（行書）宣統帝溥儀書《浩気英光》四字」朱文印〔養龢〕白文印〔宣統御筆〕白文印〔沖齢宸翰〕

内題「（楷書）黄道周書《石斎逸詩》」白文印〔宣統御賞之宝〕

原詩十三篇八十二首（楷行書）

落款「右録五言律詩八十二首、内篇次与伝対揚巻中稍別、其題目重沓、並須正定、道周再頓首。（無印）」朱文印〔沈堪寓目〕

賦詩跋文（陳宝琛、一九一五年書）

全紙三十九葉　縦三一・〇cm×横十三・六cm

右の内題に続けて次のような一文がある（稿者付加、以下同じ）。

「可以不存矣、而猶存之、謂之逸詩。凡五言律九十二首、七言律五十首、五七絶句一百六十八、古詩十一首、共三百十一章。」

これは、黄道周自身が、遺らなくてもよいが、それでもなお遺った詩を「逸詩」と呼び、五言律詩九十二首、七言律詩五十首、五言と七言の絶句一六八首、古詩十一首、合計三一一首からなると記すものである。しかし右の数字を足し算すると三二一首になり、十首多い。

『黄石斎手書逸詩』（以下、『逸詩』と略す）の詳細は次節に説く如くであるが、五言律詩のみ十三篇、計八十二首を収録する。もしこの数字が正しければ、合計三一一首としてつじつまが合う。

この五言律詩十三篇八十二首は、全て黄道周の全集『明漳浦黄忠端公全集五十巻年譜二巻』（内閣文庫蔵、道光十年刊本、以下『黄漳浦集』と略す）の巻四十四に収録される。「逸詩」ならば、本来『黄漳浦集』に収録されるのは不思議である。何故だろうか。また、五言律詩のみ刊行され、七律、絶句、古詩が『逸詩』に収録されないのは何故だろうか。

そもそも『黄漳浦集』は、福建閩県の後学陳寿祺（一七七一―一八三四）の手によって重編されたものであり、『清史稿』巻四八二「陳寿祺伝」にも、「明儒黄道周孤忠絶学、寿祺搜輯遺文、為之刊行」とあり、また謝国楨編著『増訂晩明史籍考』（上海古籍出版社一九八一年二月）の巻十九「文集題跋上」にも、「『黄忠端公全集五十巻年譜二巻清道光間刊本』明漳浦黄道周幼平撰、清福州陳寿祺編」として収められ、陳寿祺「重編黄漳浦遺集序」（全集巻首所収）を引用して解題する、信のおける全集である。

その『黄漳浦集』に収録される、道光六年（一八二六）丙戌夏四月に書かれた陳寿祺「重編黄漳浦遺集序」に次のようにある。

漳浦石斎黄公遺書、見於公門人洪思石秋子収文序。凡四部百九十有六巻、富哉、纂述之大業也。経解九種、吾郷鄭幾亭宮諭、視学浙江、以康熙癸酉授剞劂。今板存福州鼇峰書院。文集十三巻、則康熙甲午、龍巖鄭玟虚舟、取石秋所編刻之。近又重刻於漳、非全集也。余往在京師、従郷人乞得一部。既帰里、始聞公之遺書、厪存漳州一士人家、寐寤求之。嘉慶丙子、属友人、展転仮其蔵本以下来、乃海澄鄭白麓中書所編文三十六巻、詩二十四巻。視虚舟本増多数倍、字句間有小異。余以虚舟本所遺繕写十余冊、人間始有副墨矣。又鈔得石秋及荘起儔所撰黄子年譜各一巻、逸文一巻、又購得易本象二冊、鄴山講義一冊、近体五七言詩一冊、逸詩一冊、皆刻本。又駢枝別集二冊公蚤歳刻、大滌函書二冊門下士刻、皆已行世、而今始見。余謹蔵之。頃嘉興沈鼎甫大理、督閩学、聞其公全集鈔本数十冊於漳人、急仮校対、則倍於虚舟本、而不及白麓本四之一。其文有刺取已刻者、題有点竄者。蓋石秋与公季子子平編次原本。然有五十篇為白麓所遺、将白麓未及覩此本邪。余悉録而益以它時所見巻冊・遺文・遺詩数十、彙為一編、重定目録、而仍存洪鄭二家旧次。蓋積十有余年、然後公之遺集乃得攬其全、以慰平生飢渇矣。

――黄公（名は道周、石斎と呼ばれる、漳浦の人）の遺書は、その門人、洪思（石秋）の「収文序」に見えている。全部で四部、百九十六巻あり、なんと豊富なことよ、纂述の大業である。『経解九種』は、わが故郷の鄭幾亭宮諭が、浙江に視学し、康熙癸酉（三十二年・一六

九三）に刊行した。今その版木は、福州の鼇峰書院に存在する。『文集十三巻』は、康熙甲午（五十三年・一七一四）に、龍巖の鄭玟（虚舟）が、石秋の編集したものを刻した。最近、また漳州で重刻したものがあるが、これは全集ではない。私は北京に居て、故郷の人から一部を頼んで頂戴した。その後故郷に帰り、はじめて黄公の遺書が、漳州の一士人の家にわずかに存在していることを聞き、寝ても覚めても欲しくなった。嘉慶丙子（二十一年・一八一六）に、友人に頼んだところ、転々としてその蔵本を借りて見ると、なんと海澄の鄭白麓（中書）が編集した本で、文三十六巻、詩二十四巻であった。「虚舟本」に比較すると数倍増加しており、字句に少し異同がある。私は「虚舟本」が遺したものを基に十数冊を繕って写した。この世にはじめて副本が生れたのである。また、石秋（洪思）と荘起儔が編集した『黄子年譜』各一巻と『逸文』一巻を抄録した。また『易本象』二冊、『鄴山講義』一冊、『近体五七言詩』一冊、『逸詩』一冊を購入したが、すべて刻本である。また『駢枝別集』二冊は黄公の若い頃の刻本、『大滌函書』二冊は門下生の刻本があり、ともにすでに世に刊行されていたが、今始めて見たものである。私はこれらを大切に所蔵している。最近、嘉興の沈鼎甫（大理）が、閩の学府を監督し、黄公の全集の鈔本数十冊を、漳州出身の人から手に入れたということを聞き、急いで借りて校閲したところ、「虚舟本」より倍増しているが、「白麓本」の四分の一にも及ばない。文章に手を入れて刻した箇所や、書き付けて改竄した箇所がある。石秋（洪思）は、黄公の末子の子平（四男・黄麟）と一緒に原本を編集したと思う。しかし鄭白麓が遺した五十篇からすると、白麓はこの本を見ていないのではないだろうか。私はすべて抄録し、別の時に見た巻冊・遺文・遺詩の数十を増やし、集めて一編として、再度「目録」を定めなおした。その上、従来の洪思・鄭白鹿二家の旧目次を残した。十数年の歳月を費やし、やっと黄公の遺集の全部を採録でき、平生の飢渇を癒すことができた。

以上は謝国楨氏も引用する部分であるが、この序文を読むと、黄道周から百数十年後に生まれた陳寿祺が、黄道周の遺文を必死に捜し集め、龍溪の洪思石秋子（「石秋本」）、閩県の鄭幾亭宮諭、海澄の鄭白麓中書（「白麓本」）、龍巖の鄭玟虚舟（「虚舟本」）ら諸先人の編集を参照し、最終的には「白麓本」五十巻をもとに、十数年かけて全集を編集した、その経緯が明確に記されている。その中で傍線部のように、陳寿祺の生前に、すでに『近体五七言詩』一冊と『逸詩』一冊がそれぞれ刻本として存在しており、「別の時に見た巻冊・遺文・遺詩の数十を増やし」とあるように、全集に収録されたと考えられる。それゆえ「逸詩」でありながら全集に収録されるのであろう。

現存の『黄漳浦集』全五十巻本では、詩が巻の後半に集められており、

巻三十七　―　四言古詩（2）、五言古詩（55）

巻三十八　―　六言古詩（2）、七言古詩（47）、九言古詩（2）

巻三十九～巻四十四　―　五言律詩（334）
巻四十五～巻四十七　―　七言律詩（134）
巻四十八　―　五言絶句（36）、六言絶句（1）、七言絶句（11）
巻四十九～巻五十　―　七言絶句（92）

というふうに分類されている。（　）内の数字は、収録詩数であるが、一見して分かる様に、黄道周は古詩（108首）、五律（334首）、七律（134首）、五絶（36首）、七絶（103首）をすべて詩作し、その中で特に五律を好んで詩作していたことが分る（全詩716首中の47％を占める）。この偏向が、『逸詩』の五律のみを収録することと関係があるように思われる。

ところで『逸詩』の詩作は何時であろうか。黄道周の最晩年の事跡を簡潔に記すと次のようになる。

一六四五年（乙酉）は、南明福王（朱由崧）弘光元年、南明唐王（朱聿鍵）隆武元年、清世祖（愛新覚羅福臨）順治二年にあたり、時に黄道周は六十一歳である。この年の十二月六日、江西省の婺源に侵攻し、清兵との決戦に挑んだ。童家坊（江西）に到り、楽平（江西）が破れたことを聞き、信州の人民が黄道周に帰還を要請するが、さらに侵攻し、同月二十四日、新建（江西）より明堂里に到り、清兵に遭遇して大敗し、諸友とともに逮捕された。婺源に連行されるが、食事を取らなかった。

明くる一六四六年（丙戌）、南明唐王隆武二年、清世祖順治三年の正月二十四日、南京に連行されて尚膳監（斎堂）に拘留され、三月五日、処刑された。享年六十二歳。一緒に賴継謹、趙士超、毛玉潔、蔡春溶の四人が殉死した。

この事跡と詩題から詩作の時期を考えると、下限は一六四六年三月五日になる。上限については、二箇所の詩後の自注が参考になる。

右「後死吟」天慦八章、為二月九日作也、予以是為劬労之辰。崇禎壬申（一六三二年）、以是日削籍。跨驢出都、為衛士凌侮、作「重生」之詩。及辛巳（一六四一年）、以是日在詔獄対簿、作「重重生」之詩。今又是日也、羈於斎堂、故作「後死吟」及「後後死吟」。免爰・苕華、不知孰傷也。

右「後後死」毒艸十章、崇禎壬午（一六四二年）亦以二月九日、領戍出辰陽、作「重重生」。今復作此、正平云、「恐大禍之有再」。暮年嬰劇、不啻再三。造物毒頻、殊覚無味、聊増言詠耳。并録似維章兄覧察。

この二文からすると、上限の下限は一六四六年二月九日になる。すなわち詩作の時期は、少なくとも一六四六年の二月九日から三月五日の間、

あるいは最大に見積もって一六四五年十二月二十四日から一六四六年の三月五日の間になろう。但し、『黄漳浦集』の目次には、全て「丙戌」と記されており、これに拠るならば、一六四五年正月から三月五日の間になる。

なお、右二文目の自注の末尾に、この『逸詩』を書き贈った相手の名前が記されている。「維章兄」とは、黄文煥（一五九五―一六六四、字は維章、号は坤五）のことである。福建永福（今の永泰県）の人で、天啓五年（一六二五）の進士である。『明史』巻二五五「黄道周伝」に、「（崇禎十三年）帝遂に怒りを発し、立ちどころに二人（黄道周と解学龍）の籍を削り、刑部の獄に逮下し、責むるに党邪乱政を以てし、並びに八十を杖し、党与を究む。詞連編修の黄文煥、吏部主事の陳天定、工部司務の董養河、中書舎人の文震亨、並びに獄に繋がる」とあるように、黄道周を救済しようとして連座した間柄である。このように親しい友人に書き贈ったのであれば、黄道周が「逸詩」を書き贈った相手は、黄文煥一人だけではない可能性があろう。実際に、『中国書法全集56黄道周』榮宝斎一九九四年十一月発行には、書跡として《後死吟等三十首詩巻》故宮博物院蔵が掲載されている。この墨跡本では、

至新安示趙淵卿毛玄水頼敬孺蔡時培―後述(5)1～4の四首

人日新安虜帳勉観梅花―後述(6)1～3の三首

自悼―後述(2)1～8の八首

造怨―後述(3)1～8の八首

後死吟―後述(12)1～6の六首

の順に配列され、全二十九首が書写されている。落款に「漳海黄道周」とあるだけで無記年である。写真図版から見るかぎり、『逸詩』とは別人の手であるように感じるが、いずれにせよ『逸詩』が複数書写された可能性があることの証左になろう。

二、『逸詩』原文対校

以下、『逸詩』の原文を抄録し、あわせて『黄漳浦集』との文字の校異を示す。(1)～(13)および各詩1～8等の数字は稿者が付したものである。(1)～(13)の下に、先ず『逸詩』にある詩題を示す。その下に、『黄漳浦集』の目次および本文にある詩題を「　」で示した。その下の（　）内の三桁の数字は、稿者が付した『黄漳浦集』の分類別通し番号[注2]である。原詩の後の（　）内の、「　」および矢印の下の文字が『黄漳浦集』の原文と原詩である。■および□は、清朝を蔑視する文字のため欠字され、『黄漳浦集』では伏字となっている。『逸詩』の存在によって文字が判読できる例である。

(1)

過言―「過言八章、丙戌」(289)

1 鉄騎変漁陽、渡河弓馬強。雄籓不破虜、猛士倦思郷。已砕江湖夢、坐寒日月光。低回憶鳳泗、攬筆自悲涼。

(籓→藩、虜→■、回→徊、涼→涼)

2 綏皷無逃処、経営慘憺来。文臣不惜死、戎略別澂才。横命皆辺帥、嬬生総禍胎。誰能従雪夜、更抵薬師台。(皷→鼓、嬬→偸)

3 冷箭不相識、妖星白日寒、不周山已倒、聚窟勢難安。下卒軽囚虜、遺黎怨宰官。無因持破瑟、一一与人弾。(冷→令、虜→■)

4 自爾不能遯、非関世不虞。寒風疎剣術、老気誤真符。彗出鯨魚没、天傾威斗孤。投身湯火裏、蘇生与誰蘇。(気→筆)

5 老驥真無力、英心断唾壺。河枯双轄淡、鼎徙一絲扶。良士棲高閣、尚公狎釣屠。麟心逢虎兕、揮涕立斯須。

(「徒一作屠。」屠→徒、麟→麏)

6 借寇皆無敵、為劉半左襟。不才老馬顧、微病小児侵。龍血荒天地、蛙頤漲古今。孝陵松柏裏、鍾皷為誰喑。(鍾→鐘、皷→鼓)

7 世道古難料、雄図尚可揮。過河宗沢慨、守険葛侯幾。胡馬軽濫水、将軍重鉄衣。聊将墨翟意、一破古人囲。(幾→機、胡→□)

8 終年談石鷁、不肯放堅匏。運命扶三矢、時賢惜一毛。文雞頻眩影、辟鵜自珍膏。又作千秋話、漁人傲小舠。

(「尺一作矢。」矢→尺、辟→鷃、話→語)

右過言鉄騎八章

(2)

自悼―「自悼八章、時在婺源絶粒七日、丙戌」(290)

1 昔年為柳下、今日見薇陽。此道原無可、於生亦不傷。雲霓人望絶、金石鬼剤香。莫信恵連後、遂無日月光。

2 楽毅未帰趙、魯連不入秦。両書伝白璧、隻字動青蘋。得正吾何憾、微名世所親。蒼茫樵採者、不易写啼麟。(麟→麏)

3 自我甘重繭、為誰賦鼓刀。全生憐七獲、結侶失同袍。此事不経見、於心良独労。長年耽正則、垂老重依騒。

4 已発英雄歎、仍多親戚憐。径当文謝後、可在殷房前。夫子寧欺我、萇文尚有天。春秋二百載、研涙紀新編。(歎→嘆、文→宏)

5 求仁何所怨、失道未忘愁。故主日初旭、余生鳥自投。断崕千尺網、一葦大江舟。狂穉看吾独、馳駆答衆尤。(『天啓崇禎詩集』74所収)

6 天歩馮誰仗、狂瀾失一壺。麟心衝駟鉄、鳳掌落雕弧。干羽柔無力、旅常凍自枯。逍遥河上老、頻憶鄭大夫。(馮→憑)

7 匡坐慙顔閔、紆籌負管簫。風雲生造次、毛羽合飄揺。火厝難栖燕、江横怯置橋。可憐委珮者、晏晏坐花朝。(慙→愧、栖→棲、珮→佩)

8 聞言誰敢信、屢卜転多疑。截指留軍令、開心割子期。千金脩駿冢、三尺断鍪旗。射兕当熊意、君王安得知。(鍪→蝥)

右自悼昔年八章、時在婺源絶粒七日

(3)

造怨―「造怨八章、丙戌」(291)

1寇攘奔馳後、乾坤破碎時。跨墻看越騎、蒙虎視胡騎。直突晨煙上、立談夜鬼伺、竭来何処種、箇是棘門児。(墻→牆、胡騎→□厮)

2援鼓無鮑叔、空眷泣子卿。大人未叶卜、小駟浪悲鳴。不得詩書力、寧多香火情。成謀与戦克、沈痛負平生。(鼓→鼓)

3干将非不缺、悔未及期年。投足崩崕裏、料頭白額前。横行余噲伍、噩夢謝祁連。長嘯城門者、巋然各在辺。(崕→崖)

4哭世亦吾道、支天未不祥。単騎存古意、免冑譲遺芳。已結龍蛇恨、羞争魑魅光。柯亭三北事、千古不能忘。

(「尚一作譲。」譲→尚、亭→壇)

5臣子無知遇、何須問感恩。衆人皆国士、遺老自啼猿。浪急田横島、風酸角里園。五侯新卜宅、燈火各温存。(遇→過、猿→狷、角→甪)

6清嘯高人遠、吹篪老嫗尊。青雲生失様、白沢坐当門。先軫精神薄、孟明心事繁。不知千載後、何処薦芳蓀。

7長途消駿物、老驥敢揺頭。七日秦庭涙、千春漆室憂。採薪縁有疾、離黍属同仇。莫以羊斟故、軽麾泗上侯。

8建武無遺将、春秋重獲卿。辱金不鑄剣、半壁尚当城。草昧天頻夢、風雷夜屢驚。最愁蒲鎖裏、輟寝坐厳更。

右造怨寇攘八章

(4)

発自婺源復進水漿示賴敬孺蔡時培二中書―「時発婺源、趙淵卿職方、毛玄水別駕、賴敬儒、蔡時培二中書、相失寄示、四章、丙戌」(292)

1火樹難開眼、冰城倦着身。支天千古事、失路一時人。碧血題香草、白頭退釣綸。更無遺恨処、燥髪為君親。(「逐一作退。」退→逐)

2左次猶無咎、遺禽何足嗟。羲農生已遠、伊呂使人遐。傍草存孤竹、衝泥拂落花。龍胡天閉結、痛煞分山蛇。

(「湖一作胡。」胡→湖、煞→殺、分→介)

3海坼千枝樹、天傾百尺楼。辟支人自在、無忍法何求。木葉欣霜落、山魈喜暗投。従今無所繫、大地共蔵舟。

4捕虎仍之野、投豺又出関。席心如可巻、雀髩久当刪。怨子不知怨、閑人安得閑。乾坤猶半壁、未忍踏文山。(雀→鶴、髩→髪)

右発自婺源火樹四章時職方毛別駕相失在後

(5)

至新安示趙淵卿毛玄水賴敬孺蔡時培―「至新安、示趙淵卿、毛玄水、賴敬孺、蔡時培、四章、丙戌」(293)

1冠裳不可遇、繡絀日相鏦。道為時艱卸、交因日暮窮。乱羣行異類、急難少従容。三五雞鳴者、膠膠風雨中。（窮→窮、雞→鷄）
2羹沸余神鼎、魚空剰釣磯。居然城郭好、頓覚人民非。渓浅鬚眉出、山幽薇蕨肥。黄冠黄海裏、望望未当帰。（余神→猶余、山→照）
3最愛羲之筆、慇勤諫北征。斯民甘墜壑、吾道泣干城。未約龍驪夢、先拚鷗鷺盟。定知牙纛下、艸艸厭書生。
（「空一作定。」勤→懃、定→空）
4墜甑已離手、高台尚築雲。何曾宗管晏、未敢謝桓文。勢絀龍偕蟄、心精虎入羣。莫将君子意、錯怪越人軍。
右至新安示友冠裳四章

(6)

人日新安虜帳勉観梅花——「人日、新安虜帳、勉観梅花、同頼敬儒作、四章、丙戌」（294）
1人日亦逢梅、窮崕香雨来。不従辺外見、偏向帳前開。花砕馬蹄薄、人窺鳥路哀。含愁看城邑、無奈且啣杯。
（窮→窮、崕→崖、奈→柰、啣→銜）
2恍惚猶春色、全非春到時。鴻門新舞罷、羌笛小青移。駅使乖千里、君王悵一枝。飄簾自去住、莫与家人知。
3馬色明宵練、郊園阻一方。只縁山破綻、頓使雪分張。枚叔生無用、申君死不香。流雲照皓髪、慷慨此沾裳。（只→止、皓→浩、沾→霑）
4似此新相慕、何如蚤別離。西陵雀去夜、大沢鴈帰時。対酒難共醉、無言多所思。胡笳深拍拍、総為写如絲。（蚤→早、雀→鶴）
右虜帳梅花人日四章同頼敬孺作

(7)

燈夕不堪復遂絶粒是夜雷雨明日甲子抵晩雷電大作繞営不休凡三昼夜虜遂発予入南都
——「燈夕不堪、遂遂絶粒、是夜雷雨、明日甲子、抵晩雷電大作、繞営不休、凡三昼夜、虜遂発、予入南都、六章、丙戌」（296）
1孤臣未遂志、天地此離愁。碧血看猶在、霊威何所求。奇書六甲取、間道五丁収。曠野難逃処、轟然在上頭。
2春水未抽梅、蟄龍発憤来。追奔如破陣、騰踔欲揚灰。失匕英雄事、鞭山覇主才。於今無破斧、何以謝風雷。（龍→虫、陣→陳）
3震虩復連夕、蒼穹知此心。山川驚虜帳、星斗失田禽。洧水龍蛇怒、昆陽虎豹禁。誰能呼九子、別埽大江陰。
4迷麓余吾在、羣喧欲告誰。拔身良不易、失足已難追。扶悵袁絲老、排駝李廣衰。看書倚柱者、踪跡未希奇。（「抉一作扶。」扶→抉）
5甲子逢明日、会朝未泰平。雷霆蔽江漢、風序阻清明。苦節非吾学、成仁報所生。尋常餐寝事、良友莫須驚。（序→雨）
6百五日方半、重陰七七前。幽人不閉戸、猛士浪開弦。鬼砕雲門皷、天投霹靂鞭。鳴沙飛走処、可似白登年。（皷→鼓）

右発自新安謝風雷乃遂絶粒凡十四日復進水漿（六章）

(8)

至南都示諸友―「発自新安、絶粒凡十四日、復進水漿、至南都示諸友、五章、丙戌」（297）　但し『逸詩』は、第2詩未収。

1世共遺君父、吾何愛此生。焚香焼属艸、拔剣刈疏蘅。莫乞西山老、長辞東海清。荷耜与採薬、難作古人情。

（「藁本一作属艸、割薇一作刈蔬。」属艸→藁本、刈疏→割薇。）

（2諸子収吾骨、青天知我心。為誰分板蕩、未忍共浮沈。鶴怨空山曲、雞啼中夜陰。南陽江路遠、悵作臥龍吟。）『黄漳浦集』より補う。

3漢寿亭中路、貞明天上心。駃騠千里少、虫雀一朝深。喪狗非無主、断琴別解音。相看辱草下、神鬼坐蕭森。

（「末句共一作坐。」断→新、雀→鶴、坐→共）

4故園猶余木、孤臣尚有身。冠裳天已定、得失事難㦸。姓字経書外、精魂江漢浜。勿云崕上月、偏照夜行人。

（「首二句一作故園猶余木、孤臣尚有身。」故園猶余木、孤臣尚有身。→為世存名教、非関我一身。㦸→陳、漢→海、崕→崖）

5此道不為夢、逢人問汝安。破舟知海蕩、去婦説家難。裸国驕龍子、焚山狎鬼官。勿懸身後鏡、但借眼中看。

右至南都世共遺四章

(9)

又答諸訪者―「答訪四章、一作答諸訪者、丙戌」（298）

1呼蛟来水滴、張網置庭中。此道殊未学、於人何適従。金遼翻故史、江嶺慟遺弓。隻手耘鋤外、空教羿羿雄。

2殘着已経眼、胡笳時一聞。顔行無刎頸、単騎惜離羣。白水留真主、青天未喪文。何人横海上、別遣水犀軍。

3庚子鞭甘艸、陶公上小船。丈夫不愜志、児女倦悲憐。薏苡除生謗、瓜蔓断世縁。所持扳復論、無計上遺箋。（扳→恢）

4勺水関大業、彭年何所将。暗聾逃世晩、沐浴告人妨。客債新恩満、夜台古処長。河能復汎汎、別竊野鳧光。

右答客呼蛟四章

(10)

廿五日既聴質予滞禁城尚膳監中諸友分羇両県遂不可面為覓襆被不得悵然寄懐

―「廿五日、既聴質、予滞禁城尚膳監中、張毛蔡頼諸友、分羇両県、遂不可面、為覓襆被不得、悵然寄懐、六章、丙戌」（299）

1志士軽生死、家人念渇飢。知君隔岸後、又似墜弦時。風雨催塵甚、音書寄語遅。夜闌寒色緊、咬歯且相支。

2 我亦無被服、焚巣失旅人。遶床侵爇火、推枕動労薪。忍死看天意、栽詩示鬼神。諒無弾指処、嘆暗向誰陳。
3 乖離復別処、知爾不相俱。踏死生無害、分形志転孤。麟鸞収羽尾、狐豕共肌膚。不得談辛苦、陵園鐘磬無。
4 世道宜催散、相従詎偶然。飢寒関一日、沈痛事千年。曹沫奔斎後、夷吾入莒前。商量千古意、不在里人憐。
5 低回未遽爾、恐以累諸兄。跂足思林鹿、哀原悵友生。帰家猶客路、悔昔亦人情。溝瀆相拚外、知誰問姓名。（回→徊）
6 余生難得当、往時已如斯。人定天無夢、心清鬼不疑。身非裘馬致、命豈盤飡持。勿以分香意、慇懃憶女児。（「飡一作飡。」飡→飧）

右為毛趙頼蔡覓襆被不得作志士六章

(11)

斎堂―「尚膳監八章、丙戌、大滌函書作斎堂、丙戌」（300）　1詩後に「斎堂即尚膳監」とある。

1 斎堂留数椽、羈庫此褒回。胡馬行無路、幽人何処来。旧宮尚食監、遺讖単于台。不意六朝事、千春手自栽。（羈→覊）
2 王気踈楊子、黄雲宕帝宮。十方除瀁勝、半載閑羣雄。人事焼荒外、管儀狐鼠中。福堂難薦福、何地得従容。（宕→蕩、瀁→法、堂→星）
3 帝子今安在、空王古自尊。厳城天竺蹟、祇樹独孤園。遺教青無際、衰風白到門。従人瞻両足、悲痛動乾坤。（祇→秖）
4 内殿斎居日、尚方申禁時。龍文黄帕動、錦字大官馳。間賜伊蒲饌、特教外国知。南冠今楚楚、推枕一題詩。
5 偶足張床几、非関礼頞多。入林猶鼠藪、在野即魚蓑。人替僧無恙、官憐虎不苛。稍除諸束縛、已覚近山阿。
（床→牀、頞→貌、魚→漁、蓑→簑、除→遅）
6 沮溺非尊輩、什澄良可人。虎窠渾臥榻、木葉即真身。古徳焼将盡、今生墜有因。不知誰姓字、更与着天親。（澄→登、身→心）
7 不得家常力、偏行異類中。天従禽演変、人過鬼席同。椰柳十分火、獍豺別様風。無繇能拔翅、一与問鴻濛。（繇→由）
8 悲悔真無用、高吟何所為。熾烈談瓦礫、寂地佩牟尼。一死千経教、無言百薬師。華山山頂上、棄枝有誰知。（言→窮）

右斎堂六章（八章の誤記であろう）

(12)

後死吟―「後死吟、八章、二月九日作」（301）

1 天慭看遺老、筮魂報所生。余年知有幾、観世未納平。降辱経過淡、艱危入素軽。此間明浄路、不使世人驚。
2 割殺前朝事、屢衝此日来。帝心如告兆、天意豈憐才。求死仍無創、逢生知転哀。許多頑鄙事、入夢久難猜。
3 聃耳吾何敢、彭顔各一時。冰虫脩篤論、化蛻附枯枝。諸友帰無忍、先生出不辞。当年諸起倒、未与女児知。（化→花）

4此事還真宰、非関我所量。精魂鳥兎共、変化冶𪓐忙。時至自応覚、道消夕不妨。偏題溝壑句、四壁也明光。（𪓐→爐）
5往者未先覚、今茲何遽愁。百年自古有、一節為誰留。野潦私紅蓼、巌風拡碧秋。尋常思不到、潮水上江頭。
6滄海間多変、真人安在哉。聞従鳥絶処、尚有僧跏回。姉子墜崖好、蘇卿入塞来。不因吹黍律、強勉為嘘灰。（跏→伽）
7立命関終食、待時何所為。錬罡繞指気、匹婦老婦師。決策腰間剣、棹頭坐下亀。一絲牽挂処、勿使後人疑。（罡→剛、老婦→老人）
8千尺断崖路、春容幾歩寛。人当垂踵盡、道豈捨身難。天蹶遅披薬、龍傷晩入瀾。莫将眉睫意、僶仰眎魚竿。
（「捜一作披、急一作意。」捨→舎、披→捜、意→急）

右後死吟天慭八章、為二月九日作也、予以是為劬労之辰。崇禎壬申、以是日削籍。跨驢出都、為衛士凌侮、作重生之詩。及辛巳、以是日在詔獄対簿、作重重生之詩。今又是日也、羇於斎堂、故作後死吟及後後死吟。免爰・苕華、不知孰傷也。

（「右天慭八章、為二月九日作也、予以是為劬労之辰。崇禎壬申、以是日削籍。跨驢出都、為衛士凌侮、作重生之詩。及辛巳、以是日在詔獄、作重重生之詩。今又以是日、羇於斎堂、故作後死吟及後後死吟。免爰・苕華、不知孰傷也。」）

(13)（詩題を欠く）―「後後死吟、八章、丙戌」（302）　また2詩と3詩は「謁朱廟四章」（295）の第一首と第二首である。

1毒艸嘗応遍、神方写未闌。華雲河朔外、経緯斗隅間。顧眄無偕往、躊躇感独難。毎談第一乗、不作両層看。
〈2希孔将無早、師顔今已遅。盲風初破薺、凍雨未離枝。石泐雲猶吐、崖傾山不移。九京深閉塞、之子欲安之。〉『黄漳浦集』より補う。
（希孔将無早、師顔今已遅。→師孔寧無素、希顔今已遅。京→泉、之子欲安之→諸子将安之。）
〈3養養余今日、悠悠与後人。前生千畢命、大業半扶身。地缺魚龍沓、類空鳥獣因。又従盤古始、為爾一逡巡。〉『黄漳浦集』より補う。
（養養→漾漾、魚→蛇、類→空、又→得、始→語）
4久欲遺軀廓、今誰変蘧廬。衝関繇剣戟、結局賸詩書。領得木非火、情知我是魚。禹功何可冀、江漢此愁予。（繇→多、賸→賸、木→水）
5一決知殊粲、千春猶彌留。当人無両面、迷鹿転岐頭。独語神明晤、羣號猿鳥求。殤彭何艸艸、不易泚心眸。（決→吠、艸艸→草草）
6不応此縁去、端為何事来。蒲鬚軽結坐、桃核浪開杯。弱水行中渉、明河耿欲回。諒投滄海眼、未着小山埃。（着→著）
7稊稗荒仁種、耘耡漏昔年。韋編看不絶、木榻坐垂穿。福報収応淡、天発解尚懸。欲加十載学、未禁此流漣。
（淡→淡、発→啟、加→知、流漣→留連）
8原閔饒余地、榮期未喪家。所争為落節、不管別抽芽、潮刷銀蟾涙、春扇鉄樹花。親朋雕已盡、老我更何涯。（雕→彫）

9 従此能余幾、直須億萬身。安期三夜話、子晋九筵賓。金薤書荒落、雞魚畜古人。依然消一割、展転与誰隣。（雞→鷄、隣→鄰）

10 人事昏囂裏、天心冷雋中。松杉非遣雪、蘭石不関風。龐葛家相近、伊涓志不同。平生無所恨、一睨呂梁翁。

右後後死毒艸十章、崇禎壬午亦以二月九日、領戍出辰陽、作重重生。今復作此、正平云、恐大禍之有再、暮年嬰劇、不啻再三。造物毒頻、殊覚無味、聊増言詠耳。并録似維章兄覧察。

（「右毒艸八章、崇禎壬午亦以二月九日、領戍出辰陽、作重重生詩。今復作此、正平云、恐大禍之有再、暮年嬰劇、不啻再三。造物毒頻、殊覚無味、聊増言歎耳。」按重重生詩序、天慾毒草両跋、紀年互異。攷年譜、辛巳臘月、乃謫戍辰陽。壬午三月出京。毒草跋云、二月九日作重重生詩、是也。他序跋疑、皆後人竄改之誤。）

右録五言律詩八十二首、内篇次与伝対揚巻中稍別、其題目重沓、並須正定、道周再頓首。

（賦詩跋文）

此身已許高皇帝、刀鑊誰能攬寸丹。正気文山同所養、奇情鴻宝覚尤難。

孝経以外留心画、榕頌相持較歳寒。隣有瓌珍知不早、白頭退食恣伝観。

先生与倪文正論書、主遒媚加之渾深。是冊蓋造乎極矣。造次顚沛中、詩心筆勢不改、其素真天人哉。冊蔵吾邨将二百年、無有知者。今秋研忱表叔、携来京師、始見于世。桑海余生、得以休暇、焚香静坐、与先哲相晤対、何其幸也。敬題一律、以志仰止。乙卯大寒、閩県後学、陳宝琛。

三、「発婺源（三首選二）」注解

袁行雲・高尚賢選注『明詩選』（春秋出版社、一九八八年十一月発行）所収「黄道周（二首）」より「発婺源（三首選二）」を読解してみたい。詩題「発婺源（三首選二）」は、黄道周が付けた詩題ではなく、『明詩選』のものである。『明詩選』は、この一組の詩は、黄道周が江西の婺源で清兵の捕虜になり、南京へ護送される途中の作であるとし、「捕虎仍之野」と「諸子収吾骨」で始まる五律二首を掲載する。

この二首は、上述した『黄漳浦集』巻四十四所収の「時発婺源、趙淵卿職方、毛玄水別駕、頼敬儒、蔡時培二中書、相失、寄示、四章、丙戌」(292) の第四首 (4)—4、『逸詩』所収）と、「発自新安、絶粒凡十四日、復進水漿、至南都示諸友、五章、丙戌」(297) の第二首 (8)—2、『逸詩』未収）である。対照しやすいように、前節「二、『逸詩』原文対校」の数字や詩題をそのまま再録しておく。

(4) 発自婺源復進水漿示頼敬孺蔡時培二中書―「時発婺源、趙淵卿職方、毛玄水別駕、頼敬儒、蔡時培二中書、相失、寄示、四章、丙戌」(292)

4 捕虎仍之野　虎を捕らえんと仍お野を之き
投豺又出関　豺に投じんと又た関を出づ
席心如可巻　席心　巻くべきが如く
雀髩久当刪　雀髩　久しく当に刪るべし
怨子不知怨　子を怨んで怨むを知らず
閑人安得閑　閑人安んぞ閑を得ん
乾坤猶半壁　乾坤　猶お半壁
未忍踏文山　未だ文山を踏むを忍ばず

虎を捕まえようと、山野を行軍し、
豺に兵器を投げつけ殺そうとして、さらに関所を出発した。
席は巻いて丸めることができるように、我が心も巻いてしまい、
早くに白髪を剃って出家し、世を避けるべきであった。
子を怨み憎んでも、とがめたりできないし、
ひまな人は、どうしてひまを得ることができよう。
天地になお半分の領土が残っている以上、
国亡び身滅ぼした、かの文天祥の轍を踏もうとは思わない。

詩題にあるように、清兵に捕まった婺源を出発して、趙淵卿（士超）、毛玄水（玉潔）、頼敬儒（継謹）、蔡時培（春溶）の四人と一緒に南京に護送される途中、四人を見失ってしまい、落ち着かず気をもんで、彼らに贈ったものである。

首聯の「虎」と「豺（ヤマイヌ）」は猛獣で、ここは清兵を指す。「豺虎」と熟すと、貪欲で残虐な人に喩える。張衡「南都賦」（『文選』巻四）に「豺虎肆虐、真人革命之秋也。（豺虎 虐を肆にせしとき、真人 革命の秋なり。）」とあり、豺虎のごとき新の王莽が暴虐をほしいままにするとき、後漢の光武帝による革命が行われた、の意になる。ここは、豺虎のごとき清兵に捕らわれるまで、黄道周が転々と戦ってきたことをいう。

頷聯の「席心」は、『詩経』邶風柏舟の「我心匪席、不可巻也。（我が心 席に匪ず、巻くべからざるなり。）」を踏まえる。席は巻いて丸めることができるが、我が心は堅く結ばれて丸めることはできない。正しい心を変更したり、うやむやにするわけにはいかない、というのが原義であるが、ここでは、戦わずに世を避けて生きる道を選択できなかったことをいうのであろう。

頸聯の「子」は、四人の同行者、趙淵卿、毛玄水、頼敬儒、蔡時培を指すであろう。彼らを見失ってしまったことを憎んでもしかたがないという。また「閑人」は黄道周自身を指すであろう。私は四人を見失って閑なはずはない、落ち着かないというのである。

尾聯の「文山」は、南宋の政治家、文天祥（一二三六―八三）の号である。蒙古の進攻に義勇軍を率いて抗戦し、捕らえられたが降伏を拒み刑死した。黄道周は、清兵に国土の半分を占領されてしまっても、なお残り半分がある以上、あの文天祥の二の舞は御免だと結ぶ。

この詩は、抗戦を経て捕虜となった心の揺れを詠いながら、まだ明朝復興の夢を諦めていない願望の吐露である。

(8) 至南都示諸友―「発自新安、絶粒凡十四日、復進水漿、至南都示諸友、五章、丙戌」(297)　『逸詩』は第2詩未収。『黄漳浦集』より補う。

2 諸子収吾骨　諸子　吾が骨を収めよ　諸君はわたしの遺骨を収拾しておくれ。
青天知我心　青天　我が心を知らん　青天は、きっとわたしの心を理解してくれるだろう。
為誰分板蕩　誰が為に板蕩(はんとう)を分けん　いったい誰の為に、国の乱れを分かち合うのか、
未忍共浮沈　未だ共に浮沈するを忍ばず　いっしょに国家の崩壊を見るには忍びない。
鶴怨空山曲　鶴は怨む　空山の曲　鶴が人気のない山のくまで怨めしく啼き、
雞啼中夜陰　雞は啼く　中夜の陰　鶏が夜中に曇り空に鳴く。
南陽江路遠　南陽　江路遠く　諸葛孔明の出身地、南陽への道のりは遠く、
悵作臥龍吟　悵(うら)み作す　臥龍の吟　臥龍の孔明が口ずさんだ「梁父吟」をうらめしく思う。

安徽省の新安を出発して、絶食すること二週間、水漿（凶事の飲物）を口にしただけで、南都の南京に到着した。そこで死を覚悟して友人に贈ったものである。諸友は、婺源から同行してきた、趙淵卿、毛玄水、頼敬儒、蔡時培の四人を指す。彼ら四人も黄道周とともに処刑されたのである。

首聯は、処刑に臨んでの友人への願いと天への問いかけ。

領聯の「板」と「蕩」は、ともに『詩経』大雅の篇名で、生民之什「板」と蕩之什「蕩」を指す。この二篇はいずれも周厲王の無道非道を歎いた詩である。後世、政局の混乱や国勢の不穏を言うようになった。「浮沈」は浮き沈み、栄枯盛衰を言うが、ここは明朝の崩壊を指す。

頸聯「鶴怨」は、『晋書』陸機伝の「陸機在軍中被冤枉、臨刑時嘆曰、『欲聞華亭鶴唳、可得復乎』」を踏まえ、「雞啼」は『論衡』変動篇の「夜及半而鶴唳、晨将旦而鶏鳴」を踏まえる。この二句は、まもなく自分が刑に臨み、国家の為に身を捐てることをいう。

尾聯は、三国蜀の政治家、諸葛亮孔明（一八一―二三四）に借りて結ぶ。「南陽」は孔明の出身地、河南省南陽市。南京から直線距離にして七百キロ離れている。「臥龍」も孔明の故事による。臥龍はやがて雲雨を得て天に昇ることから、英雄がまだ時を得ずに潜んでいる喩え。「臥龍吟」は孔明が好んで口ずさんだ「梁父吟」を指そう。ここは、黄道周が諸葛孔明のように国を救うことができないことを歎くのである。

この詩は、前詩に比べ、明朝復興の夢が潰えて歎きに変わり、処刑の臨む覚悟が詠われている。

四、小結

『逸詩』の存在は、二つの点で重要である。一つは書作としてであり、もう一つは詩作としてである。この二点については、『逸詩』に書き付けられた、陳宝琛の賦詩と跋文が示唆に富んでいる。

此身已許高皇帝　此の身　已に高皇帝に許し　黄道周はその身体を、とっくに明朝の社稷に預けており、
刀鑊誰能攬寸丹　刀鑊　誰か能く寸丹を攬らん　誰が刀や鑊の刑罰に用いる道具で、彼の忠誠心を引き裂くことができよう。
正気文山同所養　正気　文山　養う所を同じくし　彼の正気は、文天祥と同じように養われており、
奇情鴻宝覚尤難　奇情　鴻宝　尤も難きを覚る　その奇情は、倪元璐がもっとも困難に感じている。
孝経以外留心画　孝経以外　心画を留め　「孝経」のほかに、「書は心の画なり」というこの「逸詩」の書跡を残し、
榕頌相持較歳寒　榕頌相持し　歳寒を較ぶ　「榕頌」の書跡とあい拮抗して、乱世を比べあう。
隣有瓌珍知不早　隣に瓌珍有るも　知ること早からず　隣家に珍奇な書跡があったことを、遅く知ったが、
白頭退食恣伝観　白頭　食を退けて　恣（ほしいまま）に伝観す　白髪の私は食事もとらず、思う存分鑑賞する。

先生与倪文正論書、主適媚加之渾深。是冊蓋造乎極矣。造次顚沛中、詩心筆勢不改、其素真天人哉。冊蔵吾邨将二百年、無有知者。今秋研忱表叔、携来京師、始見于世。桑海余生、得以休暇、焚香静坐、与先哲相晤対、何其幸也。敬題一律、以志仰止。　乙卯大寒、閩県後学、陳宝琛。

―黄道周先生は倪文正公（倪元璐、号は鴻宝）と書を論じて、主に「適媚」を求め、さらに「渾深」を加えることを提唱した。この『逸詩』冊は、思うにその極みに到達した書作である。明朝崩壊という危急存亡の中で、詩の心と筆の勢を変えることなく、生れつき真の天人であろう。この『逸詩』冊が、私の村で収蔵されてから二百年になるが、これを知っている者はいない。今秋、従兄弟の研忱が、北京に携えて来て、始めて世に現れたのである。大きく変化するこの世で、余生に休暇を得て、香を焚き静かに坐って、先哲と向き合っていられるとは、なんと幸せなことか。敬って律詩一首を書きつけ、仰ぎ慕う気持ちを記す。乙卯の大寒、閩県の後学、陳宝琛。

陳宝琛（一八四八～一九三五）は、字は伯潜、号は弢庵、橘穏、閩県（今の福建福州）の人である。同治七年（一八六八）の進士で、官は太保、宣統帝溥儀の太傅となった。乙卯は、一九一五年、中華民国四年、時に陳宝琛は六十八歳である。

詩の前半四句は黄道周の身体、真心、正気、奇情といった人間性を詠い、後半四句はその書作の面について評したものである。

文の前半は、「遒媚」の書法観と書作の造詣、詩心と筆勢の不変を賞賛し、後半では『逸詩』の出所伝来と自己の幸福の感慨を述べている。

陳宝琛の評価は、書作の方に主眼を置いているものの、黄道周の最晩年の生きかたを簡潔に評していよう。

もう一点の詩作ついては、袁行雲氏の『明詩選』序に次のような評がある。

清兵が居庸関から入城し、南明永暦帝（桂王）が捕らえられるまでの期間は、清兵に抗戦して殉死した多くの志士がいる。黄道周、夏完淳、張煌言、瞿式耜などの詩作は、明朝滅亡の悲壮な挽歌を歌い上げている。（同書三頁）

黄道周の詩を、正面から論じた研究書は殆ど無い。その要因は、数量の厖大さと詩意の難解さに拠るであろうが、その中でこの『逸詩』は、（わずかに二首を注解しただけであるが、）詩意が明解で、正しく「悲壮な挽歌」と言ってよい。黄道周自身が「遺らなくてもよいが、それでもなお遺った詩」を「逸詩」と呼んだ理由がここにあろう。明朝への挽歌であるからには、清朝には遺らない、遺るはずながないと黄道周が考えながらも今日まで遺ってきた、それが『逸詩』である。書作として、詩作として、この『逸詩』は黄道周の人生の終焉とも言うべき傑作に他ならない。

注1　個人蔵。民国時代の石印本と思われる。

注2　現在、内閣文庫蔵（漢10672・函317・號183・冊數24）福州後學陳壽祺編『明漳浦黄忠端公全集』の目次を作成中である。

（二〇〇四年八月二十七日受理）